

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2007 年 6 月 第 12 号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email omiya@church.jp

与えもしないのに求め過ぎていたんだろう

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

いつもなら、「ねえ、ママ肩が痛いんだけど、少しだけ肩もんでくれない？」と切に頼んでも、「え～また？じゃあ、もんであげたらいくらくれる？」と言ってなかなか動いてくれない息子が、ある夜、頼まれてもいないのにわたしの肩をもみ始めたので、思わず「どうしたの？」と聞いてしまいました。すると、「いや、与えもしないのに求めてばかりいたな～と思ってさ！」との返事。一瞬、この子の中で何か深刻なことが起きていたのではないかととても心配になってもっと踏み入って聞きましたら、「今日さ、地球^{てら}への歌を歌っていたら『与えもしないのに求め過ぎていたんだろう』という歌詞に気づいてさ。」と言うのでした。

息子の話を聞きながら、人はあらゆるものに自ら直接触れてはじめて気づくものだと思えて思い、親としての今までの自分の姿勢を反省しました。「他者への思いやり」については、きっと言葉がわかるようになった頃から言い聞かせてきたことと思いますが、しかし、子どもが気づくのは親の言葉からではなく、自分に合った物事を通してだったのです。わたしは、子どもの視点を無視して、大人の視点を強いていたのでしょう。この出来事を通して改めて子どもの背丈になってみると、大人という自分の中にはすでに決められた形があったのが見えるのです。それに子どもをあわせようとしていたのだと、反省させられました。きっとこれからも、このようなことの繰り返しの中で、大人とはいえ子どもたちを通して成長を重ねていくことではないかと思えます。ちなみに、我家では、肩もみ 10 分で 10 円と決まりです。これは子どもが見ている「どらえもん」というアニメから子どもが教えられたものです。つまり、「塵も積もれば山になる」という内容だったのですが、それまで「いくらくれる？」と言いつ返された言葉に対してわたしの頭の中には 30 分で 500 円とかの数字しか浮かべなかったのです。しかし、「どらえもん」では小さなものを大切にしていれば大きな喜びにつながると、そして主人公が実際そうできたのを見て、子どもは良しと決心がついたようです。わたしは、10 円くらいは…と思って気楽に頼んでいますが、しかし、それが結構溜まるものですね。クリスマスになったら好きなおもちゃが変える楽しみで、この頃子どもは一生懸命わたしの肩をもんでいます。わたしの、テレビに対しするネガティブなイメージも少し変わりました。韓国ドラマは例外だったのですが、説教の後に地球^{てら}へのテーマソングの歌詞が載っています。参考までに。

梅雨時期にじめじめした暑さに振り回されないで、皆さんが神さまの見守りの中で過ごされますようにお祈りしています。

聖書のみことば

ルカによる福音書7：11～17

11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。15 すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

説教

『もう泣かなくともよい』

「マリアの子」というイエスさまに対する呼び方は偏見的な意味が入った呼び方でした。つまり、子どもはお父さんの名前をとって呼ばれるのが普通でしたから、「ヨセフの子」と言われるはずなのにそうは呼ばないのです。このようなことから考えるとき、マリアが当時の社会の中で受けていた精神的な苦労が想像できるのではないのでしょうか。

日本だって、未だにシングルマザーという立場に置かれている女性たちに対して偏見的な目を向けていることは事実でしょう。経済的な部分では女性一人でも子どもを育てられるような状況にはなりつつあるものの、しかし、社会はどうしても

男性の性を優先しようとしますから、もう一方の女性はその下で強いられる歩みをさせられてしまうのです。

昔、主の母マリアがおかれていた状況とまた、現代のシングルマザーたちが抱えている精神的な重荷とは少し異なるかもしれませんが、今日の福音書、ナインという町の一人の女性、かのじょはやもめでした。早くして夫を亡くし、一人で息子を育てました。やもめとして子どもを育てることは安易な社会ではなかったときですから、かのじょが抱えていたあらゆる面での負担が考えられます。経済的な面、精神的な面、さらに、宗教＝父権主義のものとユダヤ社会から来る女性差別。つまり、女性は、生

まれたら父親の下で、結婚したら夫の下で、夫が死んだら息子の下で生きる者とされる時代的な背景の中で、ですから、かのじょにとって息子はあらゆる困難をも乗り越える力の源でもありましたし、だからこそ息子はかのじょ自身の生そのものでもあったと言えるでしょう。

しかし、その息子が若くして死んだのです。母親を一人にして残し、母より先に逝ってしまったのでした。死んだ理由はわかりませんが、確かなことは、今日はかのじょにとって大切な一人息子の葬儀の日であるということです。自分自身でもある息子が、今棺の中に納められているという事実です。この変えることの出来ない事実を、現実を、彼女は受け入れなければなりません。死を前にしている人間はなんと無力なものでしょう。自分自身のように愛する子どもであっても、その子を死から救い出すことはできない、これが人間の現実です。ですから、かのじょのこれからの息子のいない生は、息子と一緒に棺の中に納められたのと同じような生でしかなくなるのでしょう。

このとき、かのじょの周りには大勢の人が付き添っています。「その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた」と聖書は記していますから、きっとかわいそうな親子、それだけ頑張ったのに結局は死んでしまったのね、という憐れみと慰めの思いをもって人々は集っているのでしょう。しかし、苦しみも悲しみも

一緒にできるけれど、死の力からかのじょの愛する息子を救い出すことはできません。どれだけ切実に思ったって、結局は愛する者を死に渡すしかなかった人間の現実です。

このように、ナインという町は、死にいのちを委ねるしかなかった葬儀の列が並びました。町を出て墓へ向かうためです。ところが、ナインの町の葬儀の列が進む方向と反対側からナインの町に向かって入ってくる列がありました。イエスさまを先頭にして並び列です。お墓へ向かう列と主の列がある時点で正面から向き合いました。すると、対面した葬儀の列の中からまずイエスさまの目に映ったのは、母親でした。聖書は、「主はこの母親を見て憐れに思い…」と書きます。イエスさまはかのじょのことを憐れに思った、そして言うのです。「もう泣かなくてもいい」と。ところが、聖書にはかのじょが泣いている姿はどこにもありません。かのじょが悲しかったのはもちろんのことでしょう。しかし、涙を流している姿は表現されていないのです。しかし、イエスさまにはかのじょの涙が見えたのでした。「もう泣かなくてもいい」といわれるこの言葉の中には人の目には見えない人の深いところの涙を拭き取る神のいやしの力が入っている、ということが含まれているということなのです。

話は替わりますが、皆さんの中でパッションと言う映画を観られた方は覚えていらっしゃると思います。パッションはイエスさまの受難物語ですが、イエスさまがあ

らゆる苦しみに出会わされる際に、その近くには必ずと言えるくらい母マリアが着いていました。主は、言葉に表すことのできない苦しみのただ中でもお母さんの様子を感じたら必ずマリアと目を合わせるのです。大祭司のカイアフアの中庭にて尋問を受けられる際にも大勢の群衆の中から、主は母マリアを探し出します。ゴルゴタの丘に登られる際にも、担ぎきれない十字架の重さにつぶされながらも主は母マリアを探し出し、顔とあわせるのです。十字架の上でいのち耐えて死なれる際にも、イエスさまは最後まで母のことを思っていました。これは映画から感じたことですが、しかし、聖書の行間から見出すことのできないことがよく現されていると、わたしはそう思いました。

その意味からも、わたしは今日のナインの町の母親と息子の物語は、イエスさまの死と復活を先取りにした物語ではないかと思います。つまり、ご自分の死をこの一人息子の死から見出し、そして、残される母のことをやもめとされているこの母親から見出しているのではないかと、そう思うのです。だから、イエスさまは、この母親の深いところで流れている涙が見えた、一人息子を先に逝かす母の悲しみがどれだけ深いものなのかわかったということ。ですから、「もう泣かなくてもいい」と、人の深いところで流す涙を拭いとってくださり、かのじょの人生が涙にまみれての生にはならないように導くのです。

つまり、あなたの息子は死んだのでは

ない。あなたが迎えている死は生きているものと死んだものとが完全に決別してしまうようなものではないから泣かなくてもいいと。

つまり、イエスさまは「もう悲しまないで」とはおっしゃいません。この母親は息子の死のためにとても悲しんでいます。けれど主は「悲しまないで」とは言わないのです。つまり、悲しむことができることは、生きていることの証拠であるから、生きているから人の死のために悲しむことも苦しむことも出来るのです。生きているから自分の人生が死することについても悲しむことができるのです。ですから、「もう泣かないで」、すなわち、「あなたの中には今の悲しみを耐え忍ぶ力が与えられているのだ、あなたは生きているのだから」と語っておられるのです。そうなのです。「もう泣かなくてもいい」とイエスさまが死を前にして悲しんでいるかのじょに向かって言われる言葉の深い意味は、「もう世間のあらゆることに振り回されずにあなたらしく、あなたがあなたとして生きるのだ！」といういのちの言葉なのです。

人はだれでも憂鬱を持っていると言われます。その程度がどれくらいかによって現れることに差があるだけで、皆がもっている病であると聞きます。わたしも経験することですが、しかし、気持ちが沈んでいるときに、「がんばって」とか、「早く元気になって」という言葉を聞くと、沈んでいる気持ちはもっと沈んでしまうようなことを感じてしまいます。つまり、そのままに

して欲しいのに、何とかしてそのままの状態を変えようと親切にされる言葉が逆に重く感じてしまうのです。このことは、イエスさまが今日の母親とのやり取りの中で「もう悲しまなくてもいい」とは言わないのと同じことです。イエスさまは、「早く元気になって」「早く立ち直るように」とは言わないのです。かのじょが悲しむままにしておくのです。かのじょの中には今の悲しみを乗り越える力が潜まれていると確信するから、そのままにしておくのです。けれども、かのじょ自らがいやすことのできない心の深いところの涙、つまり死に負けるしかなかった絶望感、世間にあわせて諦めるしかない女性という人生の挫折感、自らの力では救い出すことのできない、人間の深いところの死の状態を生かしてくださるのです。つまり、息子を生き返らすことによって。

葬儀の列の反対側から入ってこられ、その先頭に立つ方、主イエス・キリストがすでに棺の中で眠っている息子に向かって「起きなさい」と命令されたとき、死の中に眠っていた者は起き上がってものを言い始めました。主の言葉がナインの町に訪れていた死を超え、死を支配しておられるのです。主の言葉だけが人の深いところの涙を拭いとり、真のいのちを生きるようにさせてくださるのです。

彼女にとって泣かなくなるのは息子が生きていることです。死を超えるみ言葉を所有される主は、実際に棺の中にいる、

愛する息子を生き返らせてくださったのです。お墓へ向かう人たちの足の方向を変えてくださいました。つまり、無限な力の持ち主、わたしたちのいのちの源でおられ、生きておられる方。この方が言葉を語ってくださる限り、死はナインの町はもちろん、私たちの生を覗き込んでくることはできない。覗き込んできたとしてもみ言葉が私たちとともにいる限り、み言葉によって死は陰府へと追い出されていくのだということ。

人は誰もが死ななければなりません。主の言葉によって生き返った息子も、主に憐れみを受け、心の深いところの涙を拭い取っていただいた母親もいずれのときには死ななければなりません。わたしも、皆さんも、何れの時には必ず死ぬのです。死なないでいつまでも生きられる人は誰もいません。しかし、大切なことは、どう死ぬかです。つまり、自分を造ってくださり、いのちの源でおられる神さまとの関係の中で死ぬか、それとも、神さまとは何の関係もない人のように死ぬか、このどちらかによってわたしたちのこの世での生き方はカラット変わってくるのではないのでしょうか。つまり、生きている人として生きるか、死んだ人のように生きるか、生き方が変わってくるのです。

今日の聖書の、ナインの町の息子をはじめ母親も町の人たちも、息子の死からの生き返ってきた出来事を通していのちの源でおられる方に出会いました。死を支配しておられる方に出会ったのです。つまり、

この方との出会いは、この世に生きる自分の力がちっぽけなものでしかないことを知る機会でありました。死の前で屈伏するしかない、死という限界をもって生きるしかない、そんな自分に出会ったのです。けれど、ちっぽけでどうしようもなく、ただただ死に屈伏した人生を送るしかないそんな人生のただ中に、神さまが介入されるとき、状態はまるっきり変わっていくということを知らされたのです。み言葉が人の人生のただ中に語られるとき、死をも語られたみ言葉に従うということを体験したのです。見たのです。

今や、ナインの村の人たち、母親をはじめ一人息子も、みな的人生は、死をも支配しておられる神さまに介入された、憐れみを施し、心の深いところの涙を拭いとってくださる方に出会い、きっとこれからは満たされた人生を送ることでしょう。いずれかの時には死ぬ身であっても、しかし、もはや、死はそのままの死ではなく、イエス・キリストの中においての死へと変わったということ。つまり、十字架の死を成し遂げ、復活のいのちを勝ち取った方の中においての死であるということ。ですから、私たちの死もお墓へ向かうのではなく、いのちに向かう死であるということなのです。

主は皆さんとわたしに、悲しまなくてもいいとはおっしゃいません。苦しんでもいいともおっしゃいません。「もう泣かなくてもいい」、「もう、世間のあらゆる

ことに振り回されずに、あなたらしく生きるのだ、わたしの中であなたとして生きるのだ」と語りかけておられます。つまり、私たちが生きている者であり、生き続ける者であると、そう認めておられるのです。この方の豊かさの中で憐れまれている私たちは、今週、社会からの偏見によって歪められ、曲がった人生を強いられている隣人に語り掛けたいのです。「もう泣かなくてもいい」と、「あなたの深いところの涙を拭いとってくださる方がおられる」と、あらゆることに振り回されないで、あなたらしく、あなたのものを持って生きるように、導く者でありたいです。

お祈りします。

私たちのいのちの源でおられる神さま。

わたしたちが置かれている状況がどれだけ苦しい状況であっても、主はそこからのいのちを見出し、生きる力を見出してください。愛する息子を亡くして悲しんでいる母を憐れに思い、慰め、み言葉を語ってくださったように、今わたしたちにも主はみ言葉を持って訪れ、置かれた状況に負けずに生きるように、み言葉を語ってくださっていることを知らされました。たとえ、死んだように思われる状況の中でも、それに打ち勝ち生きる希望の光が必ず注がれると語ってくださったみ言葉を携えてわたしたちの生きる場へと帰ります。私たちが、今いただいたみ言葉を独り占めするのではなく、この世の仕組みの中で苦しんでいる隣人に、大切な者を亡くして悲しんでいる隣人に語りかけ、分かち合い、ともに生き

る者として主を証しする歩みができるように、一人ひとりを導いてください。私たちの周りからあなたを褒め称える讃美が流れる、そんな証ができるように、どうぞ、わたしたちの生をあげてあなたの証し人としてください。

私たちのいのちの源でおられる主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン。

てら 地球へ…

ねえ、答えはないよ
今日の景色を忘れないようにとぼくは息をとめるんだ

昔の経験に足を取られて在りもしない壁を自分で作ってたんだ

大事にしすぎると壊れていきそうで
かけがえのないものを作るのが怖かった
僕たちはこの世界に永く生き過ぎたのかな

ねえ、答えはないよ 今日の景色を
忘れないようにと僕は息を止めた
与えもしないのに求め過ぎていたんだろう
時に過ちが僕の心を試す

見上げた夜空叶えたい未来を開く瞳に強く
映し出す
昔の自分に偶然逢ってあの頃を思い出して
たんだ

明日を思い浮かべながら寝静まった町の

ベランダから見る景色は同じなのに
生きるほどに見えなくなる素直な本当の気持ち
が
綺麗なもののばっか並べても悲しくなるだけ
だった

ねえ、足りないものを嘆くだけの僕らは
創ろうとはせず膝を抱えてるだけで
この先になりたい自分を描いたら
今すべきことが見えるから

太陽の呼ぶ声に目が覚めた昨日の赤い海を
飲み干して青に変えていく
きらきら光る時間の針の上
風に逆らう雲を明日の自分に重ねて行く
遮ぎるものが多すぎるんだよ
ここに立ってるだけじゃきっと

ねえ、答えはないよ今日の景色を
忘れないようにと僕は息を止めた

与えもしないのに求め過ぎていたんだろう

時に過ちが僕の心を試す
5年先になりたい自分を描いたら
今すべきことが見えてくるだろう
見上げた夜空叶えたい未来を開く瞳に強く映
し出す

【7月礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

7月1日(日) 聖霊降臨後第5主日

聖書：サムエル下 11: 26～12: 13、ガラテヤ 2: 11-21、ルカ 7: 36-50

主題：借りたものではなく

7月8日(日) 聖霊降臨後第6主日

聖書：ゼカリヤ 12:7-10、ガラテヤ 3: 23-29、ルカ 9: 18-26

主題：自分の十字架を背負って

7月15日(日) 聖霊降臨後第7主日

聖書：ヨナ 4: 1-11、ガラテヤ 5: 2-26、ルカ 9: 51-62

主題：キリストと共なるはじめ

7月22日(日) 聖霊降臨後第8主日

聖書：申命記 30: 1-14、コロサイ 1: 1-14、ルカ 10: 25-37

主題：あなたも同じようにしなさい

7月29日(日) 聖霊降臨後第9主日

聖書：創世記 18: 1-14、コロサイ 1:21-29、ルカ 10: 38-42

主題：必要なことはただ一つ

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 毎週水曜日午後 7 時より夕礼拝を行っています。主日日課と同じです。
- ・ 毎週金曜日午後 3 時より女性の視点による聖書の学びを行なっています。
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。
- ・ 9 月よりつき二度水曜日の午前中聖書入門クラスを、つき二度水曜夜祈祷会を開く予定です。